

## 特集「日常生活におけるコラボレーション支援技術」の編集にあたって

井上 智雄<sup>†1,†2</sup> 緒方 広明<sup>†3</sup>

近年、無線 LAN や携帯電話などのいわゆるコピキタス情報通信基盤の整備により、日常生活の様々な局面で、情報通信機器の利用が可能となった。また、センサや計算機デバイスの技術的進歩により、人間の社会活動に関わる種々の情報を取得し、計算機デバイスがそれに応じた処理や反応をすることが可能になってきた。センサや計算機デバイスの普及により、さらにその対象領域は日常生活にまで広がってきつつある。

CSCW（協調作業支援）と呼ばれる研究分野は、当初は、主として計算機とネットワーク技術による、オフィスにおけるチームやワーキンググループの支援を対象としていたが、ウェブや携帯電話の普及にとともに、ネットワークコミュニティの支援などにその対象領域を上げてきた。さらに最近の情報環境の変化に応じた、情報技術による複数人の活動支援もその対象としている。上述のような情報環境の日常化に応じて、日常生活における複数人の活動支援の研究が活発化している。具体的な研究課題として、たとえば、日常生活における人間の社会活動をどのようにモデル化するか、複数人の文脈（コンテキスト）を把握し適切なコラボレーション支援を行うための情報技術の開発、位置・個体識別・生体情報・運動などの各種センサやアドホックネットワーク等の様々な情報技術をどのように応用するか、あるいはそのようなコラボレーション支援技術の利用者や社会への影響があげられよう。

本特集は、このような日常の情報環境の中でのコラボレーション支援技術に注目し、研究成果の現状をとらえて迅速に論文を一括掲載することにより、社会に成果を公開し、研究の一層の発展に寄与することを狙いとして企画した。

編集はゲストエディタ制により、下記の特集編集委員会の責任で行った。職場や家庭、学校などの広く日常生活におけるコラボレーション支援と、これに関連するグループインタラクション、知識共有・創造活動支援、また教育・学習支援やコミュニケーション研究の理論・技術・応用・評価を含む、幅広い研究対象についての論文を募集した。投稿数は 37 件であった。論文投稿締切の 2008 年 4 月から、3 度にわたる特集編集委員会において、通常の論文と同様の査読プロセスを経て慎重に審議の結果、14 件を採録した。

通覧すると、いくつかの特徴を見ることができる。まず、携帯情報機器やテーブル型ディスプレイ他の新しい情報メディアの出現・普及という、近年の情報環境の変化が反映されている。そして、職場や家庭、学校などの日常生活におけるコラボレーション支援やその関連活動が対象とされている。研究方法としては、開発研究と分析研究双方の成果を見ることができる。本特集に収録できた論文は、本研究分野のほんの一片ではあるが、その現在形を切り取っていると考えている。

最後に、短期間の編集のうちに、これら最新の研究成果を公表することができたのは、著者の方々、査読者、特集編集委員、ならびに学会事務局の皆様のご尽力によるものであることを記して、深く感謝する。

「日常生活におけるコラボレーション支援技術」特集編集委員会

- 編集長  
井上智雄（筑波大学/国立情報学研究所）
- 編集幹事  
緒方広明（徳島大学）
- 編集委員  
荒金陽助（NTT）、市村 哲（東京工科大学）、井上亮文（東京工科大学）、  
上杉 繁（早稲田大学）、鷓飼孝典（富士通研究所）、岡田謙一（慶應義塾大学）、  
岡田昌也（ATR）、岡本昌之（東芝）、小川剛史（東京大学）、金 群（早稲田大学）、  
葛岡英明（筑波大学）、國藤 進（北陸先端科学技術大学院大学）、爰川知宏（NTT）、  
酒井三四郎（静岡大学）、関良 明（NTT）、垂水浩幸（香川大学）、  
樫山淳雄（東京学芸大学）、宗森 純（和歌山大学）、山上俊彦（ACCESS）、  
吉野 孝（和歌山大学）

†1 筑波大学

University of Tsukuba

†2 国立情報学研究所

National Institute of Informatics

†3 徳島大学

University of Tokushima